

INFORMATION [2026.7－2026.10]

🔥特別展「おとろしいもん」関連
📖学芸講座 無料・事前申込(先着順)

会場：地下1階研修室(定員72名)
申込方法：当館ウェブサイト、電話
🔥「知っとる？讃岐の怨霊(おんりょう)・妖怪」
讃岐に伝わる怨霊、崇徳上皇のエピソードや、妖怪伝説などを紹介します。
日時：8月29日(土)13:30～15:00
講師：藤井俊輔(当館主任学芸員) 申込期間：7月29日(水)～

🔥「こわい絵にはどんな意味がある？」
近現代の美術作品にみつける「怖さ」について紹介します。
日時：9月13日(日)13:30～15:00
講師：窪美西嘉子(当館主任専門学芸員) 申込期間：7月29日(水)～

「香川県民の日」創設記念
①「県展ことはじめ」
今年90回を迎える香川県美術展覧会(県展)の成立と背景を紹介します。
日時：9月27日(日) 13:30～15:00
講師：一柳友子(当館専門学芸員) 申込期間：8月27日(木)～

②「香川県ことはじめ」
数度の編入・分離を経て誕生した香川県の成立や当時の社会を紹介します。
日時：10月10日(土) 13:30～15:00
講師：芝野有純(当館主任学芸員) 申込期間：8月27日(木)～

📖イベント
「ミュージアム☆バックヤードツアー」 無料・事前申込
ふだん見ることのできない、ミュージアムのうら側をたんけんしよう！
日時：8月1日(土)、8月2日(日) 各日10:00～11:30
会場：当館バックヤード
対象：小学生 各日10名 ※小学3年生以下は保護者同伴
申込期間：6月24日(水)～7月17日(金) ※応募多数の場合は抽選
申込方法：当館ウェブサイト

食文化体験講座
「戦争中は何を食べていたの？ーすいとん作りー」 有料・事前申込
小麦粉を練ってゆでる「すいとん」作りから戦時中の食文化を体験します。
日時：8月11日(火・祝) 10:00～12:10
会場：地下1階実習室
対象：小学生と保護者 18名
※保護者1名につき小学生2名まで
参加料：ひとり300円
申込期間：7月4日(土)～25日(土)
※応募多数の場合は抽選
申込方法：当館ウェブサイト



「おしえて、ミュージアムゼミ！～香川のカタチを学ぶ～」 無料(要観覧券)・事前申込
講義と解説付き展示観覧のセットで学ぶ、ミュージアムならではの特別授業。
日時：各日10:00～11:30
1時間目「屋島のカタチ」7月23日(木)、7月26日(日)
2時間目「遍路のカタチ」9月3日(木)、9月6日(日)
3時間目「銅鐸のカタチ」9月10日(木)、9月13日(日)
講師：香川県立ミュージアム・瀬戸内海歴史民俗資料館職員
対象：中学生以上 各日24名
会場：1階図書コーナー、2・3階展示室
申込期間：6月23日(火)～(先着順)
申込方法：当館ウェブサイト

🔥「提灯をつくろう！」 有料・事前申込
昔の照明器具「提灯(ちょうちん)」を作ってライトをとし、展示室をたんけんしよう！
日時：8月7日(金)、8月8日(土) 各日10:00～11:00
講師：香川大学学生プロジェクトTERASU
対象：小学生 各日15名 ※小学3年生以下は保護者同伴
会場：地下1階工作室、2階特別展示室
参加料：ひとり550円(保護者は要特別展観覧券)
申込期間：7月3日(金)～24日(金) ※応募多数の場合は抽選
申込方法：当館ウェブサイト

「ミニチュアさぬきうどんをつくろう！」 有料・当日受付
丼に模様をつけて具を選び、本物そっくりなミニチュアさぬきうどんを作ります。
日時：8月15日(土)10:00～12:00、13:00～16:00
※材料がなくなり次第終了
講師：橋本武生氏(元中学校美術教諭) 参加料：1回300円
会場：1階エントランスホール

香川県立ミュージアム

〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002(代表) FAX.087-822-0043
https://www.kmuseum.pref.kagawa.lg.jp



分館 瀬戸内海歴史民俗資料館

〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707 FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/setorekishi/index.html



分館 香川県文化会館

〒760-0017 高松市番町1丁目10番39号
TEL.087-831-1806 FAX.087-831-1807
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/bunkakaikan/kfvn.html



日時・内容については変更になる場合があります。最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください。

「さぬきの魅力をスタンプ！ー絵はがき作りー」 有料・当日受付
香川ゆかりの消しゴムはんこを押して、オリジナル絵はがきを作ろう！
日時：9月23日(水・祝) 10:00～12:00、13:00～16:00
講師：今井真衣子氏(はんこ作家)※講師在席は午前中のみ
会場：1階エントランスホール 参加料：1回200円

📖ナイトミュージアム

開館時間を20:00まで延長します(入館は19:30まで)。
日程：8月8日(土)～10日(月)、9月19日(土)～23日(水・祝)

🔥涼風(すずかぜ)ナイトトーク 無料(要観覧券)・当日受付
落ち着いた夜の時間に、当館職員が展示室にて見どころをお話しします。
日時：各日18:30～(30分程度) 会場：各展示室内
特別展示室「おとろしいもん」8月8日(土)、9月21日(月・祝)
常設展示室1「観光地・屋島」8月9日(日)
常設展示室2「香川の風景」9月22日(火・休)
常設展示室4・5「昭和の暮らしをふり返る」8月10日(月)、9月23日(水・祝)

参加方法：当日受付(開始30分前から2階西口ビーで受付開始)
🔥プレミアムナイトツアー「ミステリーナイト」 有料・事前申込
閉館後に行う人数限定のプレミアムなツアー。カフェで特別メニューを、展示室にて展示担当者のトークをお楽しみください。
日時：8月22日(土)、9月12日(土) 各日18:00～20:00
会場：2階特別展示室ほか
申込方法：旅行情報サイト「じゃらんnet」より
申込期間：7月22日(水)～(定員20名 先着順)
詳細は当館ウェブサイトなどに掲載します



ミュージアム・ナイト・バー 無料(飲食代別途)
日時：8月8日(土)、8月10日(月)、9月19日(土)～20日(日)、9月22日(火・休)
各日16:00～19:30(オーダーストップ)
会場：1階エントランスホール
イサム・ノグチ「AKARI」ライトアップ 無料
点灯時間：17:30～20:00
会場：1階図書コーナー

■講座・イベントの申込先

申込方法はそれぞれの欄をご覧ください。
・当館ウェブサイトの申し込みフォーム
(各イベント詳細ページからアクセスできます)
・電話(当館学芸課 087-822-0247)

当館ウェブサイト



📖瀬戸内海歴史民俗資料館のイベント

講演会「自然科学から民俗資料を読みなおす」 無料・事前申込
構造力学の研究者に民俗資料を再評価いただくとともに、当館の取り組みについても報告し、これからの資料館のあり方について考えます。
日時：9月5日(土) 13:30～16:30
講師：久保光徳氏(千葉大学名誉教授)
会場：香川県立ミュージアム 地下1階講堂(定員230名)
申込期間：7月15日(水)～(先着順)
申込方法：電話(087-881-4707)または「香川県電子申請・届出システム」
※イベントの詳細は7月中旬頃に瀬戸内海歴史民俗資料館ホームページでお知らせします。



カフェポット ミュゼ
くつろぎのひとときに、カフェポット ミュゼをご利用ください。特別展関連メニューもご用意しております。
営業時間：9:00～17:00
夜間開館日は9:00～20:00
ミュージアム・ナイト・バー開催日は9:00～15:00(いずれも30分前オーダーストップ)



ミュージアムショップ
1階ミュージアムショップでは、当館オリジナルグッズも販売しています。
営業時間：9:00～17:00
夜間開館日は9:00～20:00

NEWS
THE KAGAWA MUSEUM

香川県立ミュージアム ニュース
2026 夏号
vol.68



CONTENTS

特集

讃岐の「おとろしいもん」たち

展示室だより

夏休み子どもミュージアム

能面「橋姫」

江戸時代

高松松平家歴史資料(当館保管)

ミュージアムガイド vol.53

空海室リニューアル

調査研究ノート vol.52

1930年代の日記にみる平時と戦時との距離

れきみんだより

男木島 島で紡がれた暮らしの記憶を紐解く

髪が生え際の乱れや、瞳や歯に施された金色、額の造形に、人ならざる存在への変容が表れている。橋姫は、能楽(能楽)に登場する、夫に裏切られた女性が変化(変化)した鬼である。

「香川県民の日」創設記念 特別展
おとろしいもん—「こわい」をめぐる歴史と美術

讃岐の 「おとろしいもん」たち

「おとろしいもん」とは、讃岐弁で「おそろしいもの」を意味します。人々は原始の暗闇をはじめ、理解の範疇を超えた不思議な現象、抗えない大きな自然の力など、様々なものに恐ろしさを感じてきました。当館ではこの夏、こわい、恐ろしい、怪しい等をキーワードに、歴史と美術の分野にわたる収蔵品を中心に「おとろしいもん」を紹介する特別展を開催します。ここでは、特別展のトピックの中から一部を紹介します。

讃岐ゆかりの崇徳上皇怨霊伝説

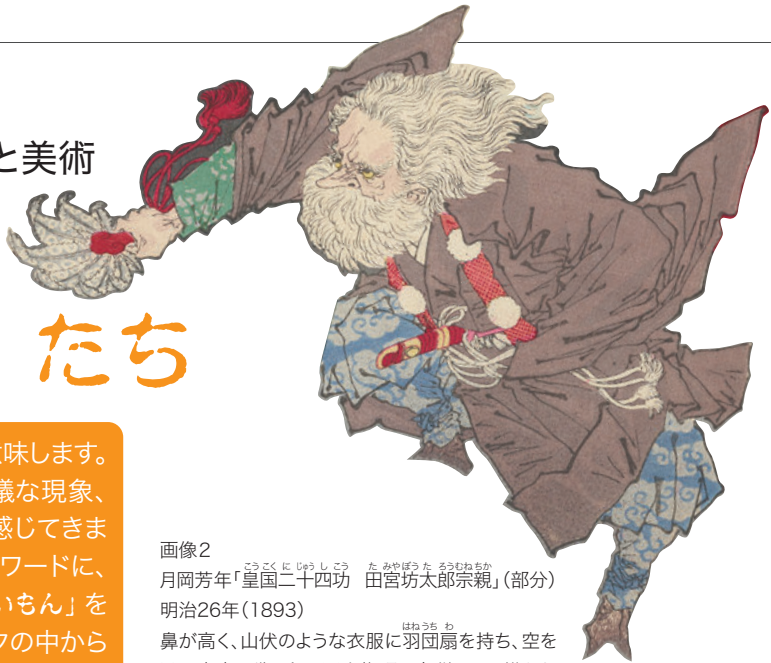
菅原道真、平将門、崇徳上皇。彼らは日本三大怨霊と言われますが、そのうち菅原道真は讃岐守として讃岐に赴任した経験を持ち、崇徳上皇(1119～1164)は白峯山に御陵があるなど讃岐にゆかりの深い人物です。

なかでも崇徳上皇は日本史上でも最も強力な怨霊といわれています。上皇は平安時代末期に起こった朝廷の権力争いである保元の乱(1156)で弟・後白河天皇の陣営に敗れ、乱の後は流された讃岐の地で余生を過ごしました。その崩御後、京都で火災や皇族の急死などが次々と起こったことから、上皇が怨霊となって災いを引き起こしていると人々が考えるようになります。治承元年(1177)には、上皇に対して朝廷が「崇徳」の諡号(おくり名)を贈って霊を鎮めています。しかし、鎌倉時代以降に記された軍記物語では戦乱を引き起こす上皇の怨霊が語られ、江戸時代にも『椿説弓張月』『雨月物語』など文学作品で描かれました。

軍記物語では、崇徳上皇は讃岐で書き写した経典を都へ送りますが、それが送り返されたことを悔しく思うあまりに「日本国の大魔縁となり、皇を取って民となし、民をもって皇となさん(日本の大魔物になり、天皇を民に、民を天皇にする)」と決意したといわれます。そして、経典に血で恨みを書き記して瀬戸内海に沈め、髪を伸ばして生きながら天狗のような姿になったとされています。このような強い恨みを持つ崇徳上皇の怨霊は、社会が混乱した江戸時代



画像1 曲亭馬琴筆・葛飾北斎画『椿説弓張月』文化7年(1810)



画像2 月岡芳年「皇国二十四功 田宮坊太郎宗親」(部分) 明治26年(1893) 鼻が高く、山伏のような衣服に羽団扇を持ち、空を飛ぶ鼻高天狗。金毘羅大権現の象徴として描かれている。

末期にも思い起こされ、戊辰戦争のさなかの慶応4年(1868)に御陵のある白峯山に勅使が派遣され、上皇の霊が京都に遷されました。

本展では、上皇が海に経典を沈めて海神に恨みを語る姿を描いた『椿説弓張月』(画像1)や、天狗のようになった姿を描いた江戸時代の絵本などを紹介します。

おとろしいだけじゃない、讃岐の天狗たち

天狗伝説は日本中で伝承されていますが、讃岐は全国でも著名な天狗の住む地域として知られ、白峯山の相模坊、金毘羅の金剛坊、五剣山の中将坊は「讃岐三大天狗」と称されています。一般に、天狗は人を化かして連れ去るなど様々な悪行をなす魔物と恐れられており、江戸時代の怪談集『太平百物語』には、讃岐の寺の小僧が天狗に連れ去られ、経を唱えて生還した逸話が記されています。そうした天狗たちとは異なり、相模坊は崇徳上皇に仕えて心を慰めたとされ、室町時代の謡曲などにも登場します。また、金剛坊は江戸時代初めに金毘羅大権現(現金刀比羅宮)を管理した金光院の別当(責任者)であった有盛が変じた姿とされ、金毘羅大権現を守護するとされました。天狗は姿かたちも様々で、くちばしを有する烏天狗もありますが、金毘羅大権現の天狗は鼻が大きく突き出した鼻高天狗の姿に描かれています(画像2)。江戸時代には、天狗のお面を金毘羅へ奉納する信仰もありました。



画像3 生田久一「百鬼夜行絵」昭和9年(1934)写 金刀比羅宮蔵 特別公開

本展では、天狗をはじめとする讃岐ゆかりの妖怪や、県内に残る妖怪に関する貴重な資料(画像3、4)を紹介します。



画像4 石田雪庵「牛鬼図」 文化5年(1808)写 根香寺蔵 特別公開

あらが 抗えないおとろしさ・災害

災害はいつの時代も「おとろしいもん」の一つです。香川県は気候が穏やかで災害が比較的少ない地域とされていますが、それでも資料からは多くの災害が起こったことがわかります。

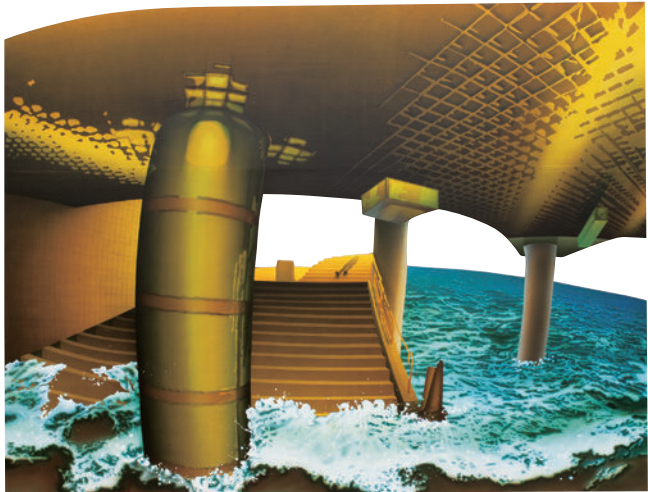
江戸時代前期に石清尾八幡宮の神官・友安盛員がまとめた歴史書『讃岐国大日記』には、欽明天皇28年(567)～正保2年(1645)までの災害115件が記載されています(表)。記録から漏れている災害も多いと思われ

れるものの、讃岐で起こった災害のおおまかな傾向をつかむことはできるでしょう。最も多く記された災害は「不雨」「大旱」などと記される旱魃31件で、昔から讃岐では渇水に悩まされていたことがわかります。次いで多いのは大風・大雨といった風水害25件です。12件を数える疫病の中には、農作業に欠かせない牛馬が感染する疫病も見られます。また、室町時代の応永17、18年(1410、11)には、2年続けて大量に発生したネズミが作物を食い荒らすという類例のない飢饉も記されています。これらを平均すると約9年に1回は何らかの災害が起こっています。同じ年に旱魃・風水害にともなう飢饉や疫病が起こるなど、短期間に災害の連鎖が起きた悲惨な事例もあります。

本展では、讃岐で起こった地震や渇水、海難といった災害にまつわる資料のほか、阪神淡路大震災に危機感を抱いて制作された絵画「占領する波(18)」(画像5)を紹介します。

旱魃	31
風水害	25
天候不順※	19
地震	16
飢饉	12
疫病	12

合計 115
※季節外れの降雪などを含む
表 『讃岐国大日記』にみられる災害



画像5 四宮金一「占領する波(18)」平成8年(1996)

香川ゆかりの「おとろしいもん」に関する資料や作品には、人々が何をこわい、恐ろしいと考えていたのかが反映されています。その恐れや不安をどのように受けとめ、伝え、表現してきたのかを歴史と美術を通して見てみませんか。

(主任学芸員 藤井 俊輔)

※所蔵者の記載のない資料はすべて当館蔵

「香川県民の日」創設記念
特別展 おとろしいもん
—「こわい」をめぐる歴史と美術—
会 期：8月1日(土)～10月4日(日)
会 場：特別展示室
開館時間：9:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)
※夜間開館 20:00まで
8月8日(土)～10日(月)、
9月19日(土)～23日(水・祝)
休 館 日：8月24日(月)、31日(月)、
9月7日(月)、14日(月)、24日(木)、28日(月)
観 覧 料：800円、前売・団体(20名以上)650円
※高校生以下の方、県内在住の65歳以上の方、
障害者手帳・特定医療費(指定難病)受給者証・
小児慢性特定疾病医療費受給者証等の提示者
とその介護者の方は無料



おや？この2つの展示会にはナゾがたくさんあるぞ！
夏休み中の探偵諸君にはこのナゾがとけるかな？
ミュージアムにいそげ！！



常設展示室 1

観光地・屋島 ―“やしま”に何があるん？

7月18日(土)～9月27日(日)

◎ミュージアムトーク：7/26(日)、8/15(土)、9/20(日) 各14:00～

ようこそ常設展示室1へ。ここでは主に大正から昭和時代の地図にかかれた屋島を紹介している。むむ、なにやら地図のなかの屋島にはおもしろそうなナゾがかくされているようだ。

①と②の地図をくらべてみよう。どっちがあとから作られた地図か、わかるかな？え、発行年を見ればわかるじゃないかって？見るところはそこじゃないんだ。②には「屋島ケーブル」はあるが①にはない。屋島ケーブルは屋島をのぼる人のために昭和4年(1929)に開業したものだから、①はそれより前の地図ってことになる。だから②の方が新しいと考えることができるんだ。

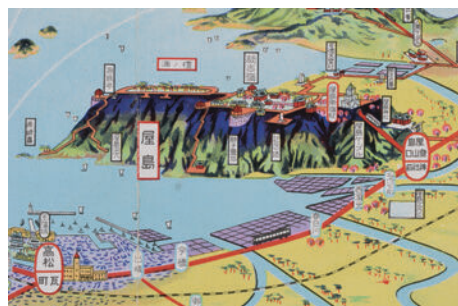
ほかにもあるぞ。①より②の方が屋島の高さを強調しているが、それはなぜだろう？これらの地図を作ったのは四国水力電気株式会社と讃岐遊覧電鉄連合会という鉄道を運営する組織だが、なぜ鉄道会社が地図を作るのだろうか？

この夏休みはミュージアムで、地図にかかれた屋島を見て、ナゾを読みといてみないか。

(専門職員 横山 達磨)



①「屋島遊覧電車御案内(部分)」昭和時代初期、四国水力電気株式会社 当館蔵



②「讃岐遊覧案内(部分)」昭和時代初期、讃岐遊覧電鉄連合会 当館蔵

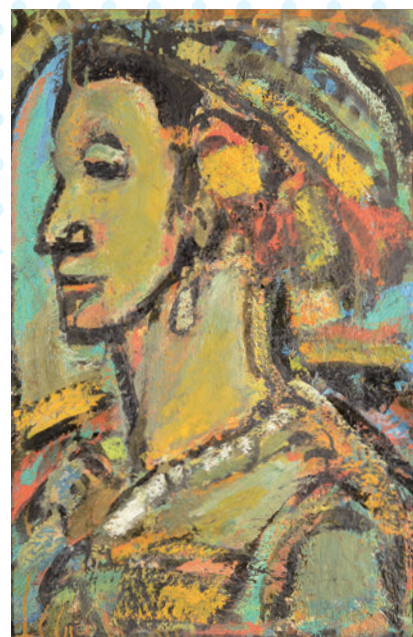
常設展示室 2

アート・コレクション 20世紀の美術Ⅲ

20世紀のびじゅつ

―ヨーロッパではどんな絵をかけた？ 7月18日(土)～8月30日(日)

◎ミュージアムトーク：7/25(土)、8/9(日) 各14:00～



ジョルジュ・ルオー 「モニック」1953～56年 当館蔵

ようこそ常設展示室2へ。ここでは20世紀のヨーロッパでかかれた絵を紹介している。どうやらこの色々な絵の中にたくさんのナゾがかくされているようだ。

ルオーの「モニック」は、きれいな髪飾りをつけた人の横顔をかけた作品だ。油絵の具を使って、たくさんの色を、何度も何度も塗り重ねているぞ。

この絵のナゾは、もしかしたら逆さまにかかれたんじゃないかってことだ。そんなことあるわけないって？よく見てほしい。絵の中にちゃんと証拠がある。人の顔のあたりと、絵のすみっこが怪しいかもね……。

ルオーは絵をかくときには慎重に、じっくり悩んで、色々試してはかきなおして、完成まで何年もかかったそうだ。逆さにしてすみずみまでかいたのかな。かくのは大変そうだけどカラフルですてきな絵だね。

ほかの絵にも不思議なナゾが見つかるぞ。ぜひミュージアムで挑戦してほしい。

(専門学芸員 一柳 友子)

関連イベント

毎月19日の「育児の日」にあわせて
子ども向けトークを開催します

日時：7/19(日)、8/19(水) 各11:00～、14:00～ 申込不要

対象：年中～小学生(小学3年生以下は保護者同伴) 参加無料(保護者は要観覧券)

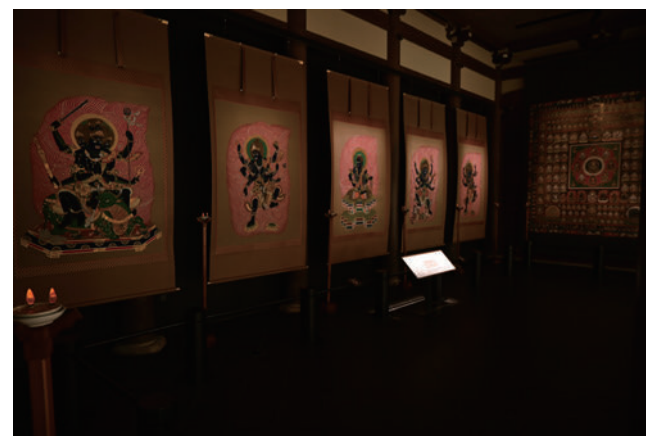
空海^{くわい}室^{かい}リニューアル 空海の存在感を、より深く感じられる展示空間へ。

当館2階の常設展示室3、通称「空海室」。郷土の偉人・弘法大師空海の生涯と事績を紹介する展示室として平成11年(1999)の開館時から設置されていますが、令和7年(2025)度にそのガイダンス機能を充実させるリニューアルに取り組みました²。空海の生涯をたどる絵巻に沿って、空海ゆかりの資料・作品の実物や高精度複製品を展示することにより、空海のドラマティックな足跡を追いかける基本コンセプトを生かしながら、新たな導入サインの設置や解説文の日英併記などの更新に加えて、とくに、空海という人を感じられるような演出を導入しました。



画像1 新設した導入サイン

もともとこの展示室は、東寺(京都)灌頂院の内陣空間を70%の縮尺で再現しています。空海が最晩年に天皇へ奏上して始まり現在も継承されている、玉体安穩、国家安泰、五穀豊穰を祈るための宮中での密教儀式「後七日御修法」の場と同じように、両界曼荼羅と五大尊像の掛幅を空間に配置しています。各幅の前には実際に使われる灯明を参考に照明器具を設置し、天井からのLED照明は明るさを抑えつつ温かい色味にすることで、堂内の儀式空間としての再現性を高めることができました。曼荼羅と五大尊像は二種類あり定期的に入れ替えます



画像2 内陣空間(曼荼羅と五大尊 部分)

が、そのうちの一つは、仏画師・中村佳睦氏が御修法に用いられている江戸時代のもを縮尺(曼荼羅：65%・五大尊像：90%)して描き写したもので、絹地に彩色や截金などを施しています。金泥や截金文様の金色は灯明型照明のわずかな光を受けて反射し、おそらく空海自身も体験したであろう密教絵画の輝きがイメージできるようになりました。

空海は名文家で、その著作や言葉が多く残されています。そこで現代の私たちにも共感できそうな空海の手紙を選び、展示空間の演出にしたいと考えました。できるなら、名筆でもある空海の手紙でそれらの言葉が伝来しているのが理想でしたが、そもそも真筆とされる書の遺品は限られ、空海の手紙は残されていません。どの書体で表現するのが相応しいか悩んでいたそんな時、香川大学創造工学部教授の岡崎慎一郎氏が空海の手紙をAI技術によって再現することに成功したというニュースを偶然知り、そのAIを用い5つの言葉を空海の手紙で再現することができました。開設時には考えられなかった今日のデジタル技術によって、展示室中央の柱の間に空海の手紙が浮かび上がり、その向こうの空海像(原資料：元興寺蔵、重要文化財)と重なることで空海の存在感も表現されています。

近年、この展示室では「空海の生涯を体感できる場所」という再評価をしてきましたが、この度のリニューアルで「空海を感じることができる場」になったのではないのでしょうか。

(学芸課長 三好 賢子)



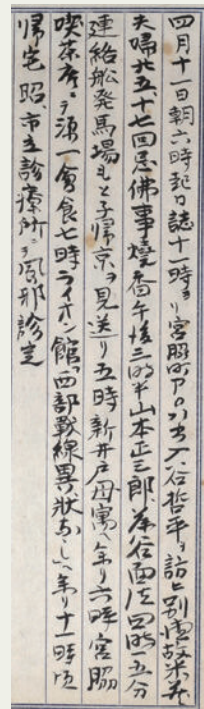
画像3 空間に浮かび上がる空海の手紙 (画像提供：乃村工藝社)

注 1.空海の2文字目を「さんずいに毎(海)」ではなく「毎の下に水」とする表記は、空海自身の記名に合わせたものです。当時すでに「海」の字が存在していたことから、特に本人がこだわった表記と思われます。

2.本リニューアルは、令和7年度文化観光拠点推進事業のうち「空海室展示強化事業」として実施したものです。
施工：[展示演出等]乃村工藝社、[照明]YAMAGIWA

1930年代の日記にみる平時と戦時との距離

昭和初期の高松市内では、一般市民にも衣食住の欧米化が広がりを見せ、百貨店や近代的なホテルが開業するなど、娯楽や消費を楽しむ都市空間が形成されつつありました。その一方で、昭和6年(1931)には満州事変が勃発し、日本は15年にわたる長い戦争へと突入します。

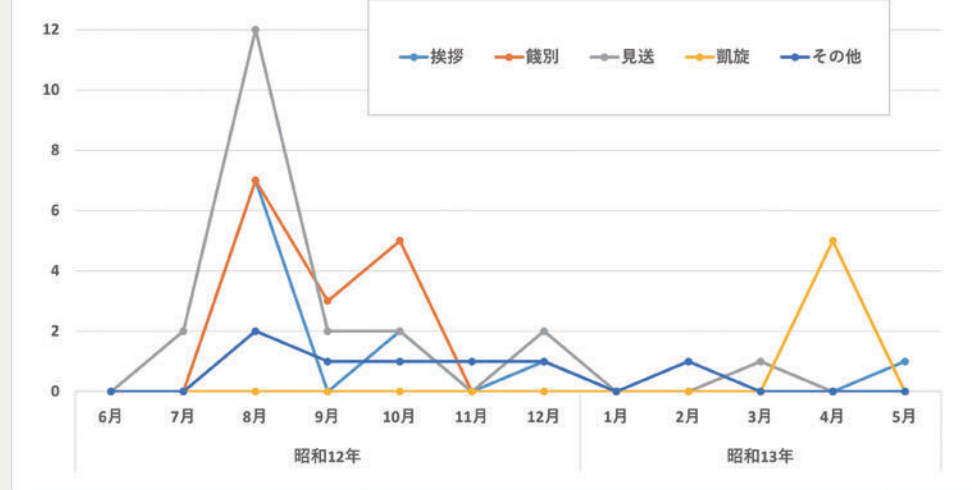


画像 1冊目の日記より昭和7年4月11日の記述(部分、徳田カヨ子資料)当館蔵

この時期の高松市内の日常をうかがえる2冊の日記が、当館に収蔵されています。大正末期から昭和40年代にかけてのある家の資料群の中に含まれるこの日記は、高松市宮脇町に住んでいた徳田重蔵(1887～1951)のもので、1冊は昭和7年4月11日から翌年9月11日にかけて、もう1冊は昭和11年9月23日から同13年5月24日にかけて書かれています。重蔵は会社を経営していたようで、訪問先や相手の情報、預貯金の記録など、時刻と出来事が記されています。さらに、仕事以外にも、読んだ本や鑑賞した映画、参加した講演会や訪れた展覧会など、趣味や娯楽に関する記述もあり、公私にわたる生活の様子がわかります(画像)。これらの日記から重蔵の日常をたどってみましょう。

17ヶ月にわたる1冊目の日記では、読書や講演会・展覧会、映画鑑賞など趣味の記述が目立ちます。例えば、映画に関する記述だけでも37回に及び、映画を観ていない月はいわずか3ヶ月です。昭和6年に発生した満州事変などの影響を受けた映画や講演会なども一部確認できますが、出征に関する記述は見受けられません。

一方、21ヶ月にわたる2冊目の日記では、昭和12年8月16日を境に軍事関係、中でも出征に関する記述がたびたび登場します。



グラフ 昭和12年6月～同13年5月における出征兵士に関する記述件数(2冊目の日記より抜粋)



これは、同年7月7日の盧溝橋事件に端を発する日中戦争の勃発と、それに伴い8月14日に善通寺の第十一師団司令部が四国地方の各連隊に兵士の召集を命じたことが背景にあると考えられます。本文には、出征兵士への挨拶や見送りの記述が多く、重蔵の日常にも戦争の影響が及んでいるようです(グラフ)。

また、出征兵士への「餞別」の品が記されることもあります。「千人針」は千個の縫い玉を作り武運長久を祈る布で、銃弾除けとして身に着けられました。その他、色紙や玄米、晒木綿などが餞別として渡されています。

さらに、「蜂穴社へ町内出征者凱旋希望祈願」も出征に関する記述です。石清尾八幡宮の境外末社である蜂穴神社は、室町時代の武将・細川頼之が戦に勝利した後に創建したと言われ、その由緒から出征者の戦勝が祈願されたのでしょう。

では、昭和12年8月以降、重蔵の趣味にも戦争の影響は及んだのでしょうか。

2冊目の日記でも、趣味の記述は1冊目と同様に継続して確認されます。ただし内容に注目すると、昭和12年8月以降特に、重蔵は戦地・時局に関する本や講演会、映画にも触れているようで、同年10月～12月の映画鑑賞4回のうち、2回がニュース映画だと記されています。また、映画に関する記述は減少し、10件にとどまります。

出征兵士関連の記述は11月に一度減少するものの、日記終盤までたびたび確認できます。

そして、昭和12年の大みそかに「より強く銃後を固めよ大和族は」としたための年賀状100枚を発送とあるのも注目されます。昭和7年と同11年にはこのような記述は見られないことから、重蔵自身にも変化があったのかもしれませんが。記述は昭和13年5月24日で途絶えているため、これ以降の重蔵の日常をたどることは出来ませんが、日中戦争は長期化し、さらに昭和16年12月には日米開戦を迎えることになります。

この日記では、昭和12年8～10月頃が、出征の挨拶や歓送などの形で、重蔵の生活に戦争の影響が表れてくる時期だと考えられます。これらの日記は連続した時期のものではありませんが、2つの時期を比較することで日常生活の変化を垣間見ることができます。日常生活の中で徐々に戦時の要素が増えていく様子を示すこれらの日記は、戦後80年を経た現在においても重要な歴史資料だと言えるでしょう。当館では、この日記のほかにも戦争に関わる資料を多く収蔵しています。これらの資料とも合わせ、県内における戦時生活について調査を進めたいと思います。

(主任学芸員 芝野 有純)

男木島 島で紡がれた暮らしの記憶を紐解く

瀬戸内海歴史民俗資料館では令和5年(2023)度から「地域の伝統文化・技術等の調査記録・発信事業」として、かつて当館が調査した島しょ・諸職・民俗芸能の現状を把握し、その変化などを確認しています。昨年度後半からは、NPO法人男木島生活研究所の協力を得て男木島(高松市)の聞き取りや古文書、民具の調査などを行っています。

男木島

高松港からフェリーで約40分の男木島は、江戸時代は直島、女木島などとともに幕府の直轄地でした。明治23年(1890)には女木島と合併して雌雄島村となり、昭和31年(1956)に高松市と合併しました。昭和30年の男木島の戸数は220戸、人口は1,044人であり、記録によると文化10年(1813)の戸数は162戸、人口は662人で、田はほとんどなく、畑作と漁業が盛んな島でした。当館には、香川県教育委員会が実施した「民俗資料緊急調査」(昭和39年)と「民俗分布調査」(昭和56年)の男木島調査カードが収蔵されており、高度経済成長前後の島の暮らしのようすをうかがうことができます。また昭和48年の開館以来、男木島の漁撈用具や畑作用具など約220件が収集されており、その一部は重要有形民俗文化財にも指定されています。

暮らしの記憶を紐解く

男木島では、瀬戸内国際芸術祭を契機に若者のUターン・Iターンが進み、平成26年(2014)には休校になっていた学校が再開されました。しかし、その後も高齢化は進み、現在の人口は約120人(世帯数約90世帯)で、その三分の一は移住者となっています。男木島生活研究所は、島の文化の掘り起こしや発信に取り組んでいます。近年の島の急激な変化を目の当たりにして「男木島のアイデンティティって何だろう」、「今、島のお年寄りから聞き取りをしておかなければ、次の世代に伝えていけない」、そんな危機感から当館との共同調査を始めました。

高度経済成長以前の男木島の歴史や文化を紐解くうえで参考になる本があります。島出身の小説家西村望の『男木島の歴史』(昭和33年)です。島の遺跡や神話、古記録にあたりながら歴史を紐解きつつ、島の古老(明治初年生れの人たち)からも聞き取りを行い、今ではほぼ聞くことができなくなった島の習俗や伝説を書き残しています。

今回の調査では、かつて採集記録された暮らしのようすが、その後どのように変化したり廃絶したりしたか、今も記憶として引き継がれているかについても確認しています。また、直島に伝わった男木島関連史料(当館蔵)も紐解き、男木島の歴史に新たなページを書き加えることを目指しています。

急務! 当館の役割

しかし、西村は前記著作のあとがきで次のように記します。



男木島調査風景

「去年あって訊いた老人に、今年また同じことを訊きに行ってみる。去年はくわしく教えてくれたその人が、今年はもうウロ覚えなのである。おとどし、あの人にあれを訊いたように思う。しかしその人は今年すでに亡いのである」。平成から令和にかけて、地域の生活文化の変化は激しく、自然環境に根ざした暮らしのようすを掘り起こす作業は年々難しくなっています。当館に課せられた役割の一つは、地域文化の継承に心寄せる人たちと一緒に、継続的に掘り起こし作業を行うことと考えています。

(瀬戸内海歴史民俗資料館 専門職員 田井 静明)

展覧会情報

企画展

男木島 民の道具と声 —島で紡がれた暮らしの記憶—

会 期：7月4日(土)～8月30日(日)
会 場：瀬戸内海歴史民俗資料館 第1展示室
中2階 瀬戸内ギャラリー
協 力：NPO法人男木島生活研究所

イベント情報

れきみんトークイベント

無料・事前申込

男木島のアイデンティティって何だろう

企画展に関連して、当館職員と島内外の協力者より、歴史・民俗の視点から見た島の姿や、現地調査について紹介します。

日 時：8月23日(日)9:30～12:00

会 場：香川県立ミュージアム
地下1階 研修室(定員72名)

申込期間：7月15日(水)～
(定員になり次第受付終了)

申込方法：電話(瀬戸内海歴史民俗資料館
087-881-4707)
または「香川県電子申請・届出システム」